共生・協働の地域社会づくり

鹿児島県内で元気に共生・協働に取り組む団体を紹介します。

鹿児島市　NPO法人

◎ネイチャリング・プロジェクト

《問い合わせ》☎099(219)5739

持続するNPOのために

ネイチャリング・プロジェクトは、平成12年に設立された県内でも最も歴史あるNPO法人の一つである。

現在、NPOのマネジメントやバックサポート、女性起業家の支援、社会貢献の意識とビジネスのスキルを併せ持つ「社会起業家」の育成を続けながら、東京、ロンドン、アメリカとさまざまな地域で企業やNPOとのネットワーク作りに奔走している。

今回の取材の時も、代表理事の松村一芳（まつむらかずよし）さんは、ロンドンから帰ってきたばかりだった。イギリスでは、日本でのNPO（non-profit organization／非営利組織）に近いものとして「社会的企業(Social Enterprise)」がある。「社会的企業」とは、営利のためだけに活動をするのではない企業、社会貢献を経営の中軸においた企業という意味である。イギリスの社会構造は日本と似ているため、イギリス型のNPO「社会的企業」という考え方のほうが、寄付に基づくアメリカ型のNPOよりも日本社会に根付きやすいと考え、ロンドンで、NPO、行政、コミュニティの関係性について調査・研究を行っているのだという。

▲イギリスの社会的企業を視察研修。

「NPOは社会的インフラ、つまり学校や水道など社会を支える基礎となるものの一つなんです。サービスを提供し続けること、サービスによって社会に成果がもたらされていくことを常に求められている。だから、NPOとして活動を続けて行くには、必ず『経営』していくビジネス的なスキルが必要です。それを現場もサポートする側も身につけることが必要。『経営する力』は『生きる力』です」と松村さん。

他のNPOを支援する中間支援組織として、さまざまな団体の設立や運営の相談に応じ、サポートし続けてきただけに、単に思いだけではやっていけないNPOの難しさ、そして経営面でのスキルアップの必要性を感じているようだ。

「NPOが活動しやすいように、スタッフを育て、ネットワークを先に作っていく。後はバックサポートに回る。大変ですがとてもやりがいのある仕事です。最終的には鹿児島で社会起業家養成学校を作り、鹿児島でしか学べない何かを発信していきたい。そうすることで鹿児島に人が集まり、福祉、まちづくり、子育て支援など社会性のあるサービスを多数提供することにより雇用が生まれると思うんです」。

社会を支えていくために世界中でNPOが必要とされている今、ネイチャリング・プロジェクトの幅広い活動はすべて「鹿児島をもっと良くしたい」という想いにつながっている。

▲起業のヒント・エッセンスがつかめる『女性のためのキャリア形成セミナー』（文部科学省委託事業）

▲NPOの起業・経営のためのセミナー（公共職業訓練）。

代表　松村さん

鹿児島に活力を生むために、これからもコミュニティビジネスの担い手である社会起業家をサポートしていきます。

屋久島町　NPO法人

◎屋久島うみがめ館

《問い合わせ》☎0997(49)6550

ウミガメを守ることが、環境を守ることにつながる

「いつの間にか23年。こんなつもりじゃなかったのに、ウミガメに人生をかけることになってしまいました」と屋久島の永田いなか浜でウミガメの保護活動を行うNPO法人「屋久島うみがめ館」の代表大牟田一美（おおむた かずよし）さんは笑う。

大牟田さんは永田地区の出身。東京の大学を卒業後、企業に就職したが、カメラマンを志し退職。35歳の時、写真集の撮影のため故郷屋久島に帰り、護岸工事によって子どものころに遊んだ砂浜が少なくなっていることにショックを受けた。「このままだと屋久島から砂浜がなくなってしまう。どうにかできないか」。そこで大牟田さんは近くの青年たちに声をかけ、何かできないか話し合った。「永田の浜にはカメが来る。まずカメを守ることから始めれば、浜が良くなるかも。やってみよう」ということになった。

◀甲羅（こうら）の長さを測る。

こうして昭和60(1985)年、うみがめ館の前身「屋久島ウミガメ研究会」が発足した。屋久島は日本一のアカウミガメの産卵地。そこでまず産卵のために上陸したウミガメの生態調査を始めた。ウミガメの産卵シーズンの5月から7月まで、毎夜、個体数、上陸時間帯、産卵数などの調査を行った。3カ月間睡眠不足の毎日が続いたという。この生態調査は現在まで続いており、世界に認められるものとなっている。

生態調査のほか、岩場にはまったウミガメの救出、流失の恐れがある卵の保護、ウミガメの上陸や子ガメが海に向かう際に障害となるゴミの清掃、ウミガメを車の光などから守り、海岸を保全するための植樹、ウミガメについての講習会など、町や県、環境省とも協力してさまざまな活動を行っている。

このうみがめ館の活動を支えているのが、全国各地から集まってくるボランティアスタッフ。5月から9月までの5カ月間、カメハウスで共同生活をし活動する。寝袋で眠り、自炊しながら夜中に調査を続けるハードなボランティアのため、スタッフの確保も毎年の課題だ。

平成5(1993)年に屋久島が世界遺産に登録され、大牟田さんは、環境保護の機運が高まると期待していた。しかし、ウミガメの産卵を見ようとやってくる観光客が急増し、車のライトに驚いて親ガメが上陸できなかったり、観光客が子ガメを見ようとして巣穴を踏み、ふ化前後の子ガメが死んでしまったり、ウミガメにとって危機的な状況が起きているという。

涙を流しながら産卵する親ガメのようす、子ガメが次々と海に向かうようすは「生命」の営みが凝縮されているようで感動的だ。見たい気持ちは理解できるが、だからといって人間がウミガメの産卵とふ化を妨げるようなことがあってはならない。

「悲しいことですが、自然と人間は共生できないもの。人間がそばにいると自然は滅んでいくものです。だからこそ、守るための努力が必要なんです。今、ふ化した子ガメが30年経って屋久島に帰ってきたとき、産卵できる浜が残されているように活動を続けていきたいと思っています」。

自然と人間は共生できないもの。だからこそ守る努力が必要という言葉が心に響いた。

▲子ガメが人に踏まれて死んでしまうのを防ぐため、立ち入り禁止のロープを各行政機関と協力して設置する。

代表　大牟田さん（左）とボランティアスタッフ

ウミガメの生態と現状を理解してもらうとともに、現在、屋久島で直面している問題について広く知ってもらいたいです。

飼育した子ガメを海に帰す放流会。▶